# 百人一首

# 小倉山荘色紙和歌

秋の田のかりほの庵の苫をあらみわか衣手は露にぬれつゝ
天智天皇

春過て夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山
持統天皇

あしひきの山鳥の尾のしたり尾のなかなかし夜を独かもねん
柿本人麿

右隆文庫

田子の浦にうち出てみれは白妙の富士のたかねに雪はふりつゝ
山辺赤人

おく山に紅葉ふみわけなく鹿の声きく時そ秋はかなしき
猿丸大夫

かさゝきの渡せる橋にをく霜の白きをみれは夜そふけにける
中納言家持

天の原ふりさけみれは春日なる三笠の山に出し月かも
安倍仲麿

わか庵は都のたつみしかそすむ世をうち山と人はいふなり
喜撰法師

小野小町

花の色はうつりにけりないたつらに我身よにふるなかめせしまに

蝉丸

これやこの行くもかへるもわかれてはしるもしらぬもあふさかの関

参議篁

わたの原八十嶋かけてこき出ぬと人にはつけよあまのつり舟

僧正遍昭

天津風雲のかよひ路ふきとちよおとめのすかたしはしとゝめむ

陽成院

つくはねの峰よりおつるみなの川恋そつもりて淵となりぬる

河原左大臣

みちのくのしのふもちすりたれゆへにみたれそめにし我ならなくに

光孝天皇

君かため春の野に出て若菜つむ我衣手に雪はふりつゝ

中納言行平

立別いなはの山の峰におふるまつとしきかは今かへりこむ

在原業平朝臣

ちはやふる神代もきかす竜田川からくれなゐに水くゝるとは

藤原敏行朝臣

すみの江のきしによる浪よるさへや夢の通路人めよくらん

伊勢

難波かたみしかき葦のふしのまもあはてこのよをすくしてよとや

元良親王

侘ぬれは今はたおなしなにはなる身をつくしてもあはんとそ思ふ

素性法師

今こむといひしはかりに長月の有明の月をまちいてつるかな

文屋康秀

ふくからに秋の草木のしほるれはむへ山風をあらしといふらん

大江千里

月みれはちゝにものこそかなしけれ我身ひとつの秋にはあらねと

菅家

このたひはぬさもとりあへす手向山紅葉の錦神のまに〱

三條右大臣

名にしおはゝあふさか山のさねかつら人にしられてくるよしもかな

貞信公

をくら山峯のもみち葉心あらは今ひとたひのみゆきまたなん

中納言兼輔

みかの原わきてながるるいづみ川いつみきとてか恋しかるらん

源宗于朝臣

山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬとおもへば

凡河内躬恒

心あてにおらばやおらん初霜のおきまどはせるしらぎくの花

壬生忠岑

有明のつれなく見えし別より暁ばかりうきものはなし

坂上是則

朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里にふれる白雪

春道列樹

山川に風のかけたるしがらみはながれもあへぬ紅葉なりけり

紀友則

久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらん

藤原興風

誰をかもしる人にせん高砂の松もむかしの友ならなくに

紀貫之

人はいさ心もしらずふるさとは花ぞむかしの香ににほひける

清原深養父

夏乃夜ハまたよひなから明ぬるを雲のいつこに月やとるらん

文屋朝康

白露に風の吹しく秋の野ハつらぬきとめぬ玉そちりける

右近

わすらるゝ身をは思はすちかひてし人の命のおしくもある哉

参議等

あさちふの小野の篠原しのふれとあまりてなとか人の恋しき

平兼盛

しのふれと色に出にけり我恋ハ物や思ふと人のとふまて

壬生忠見

恋すてふ我名ハまたき立にけり人しれすこそ思ひそめしか

清原元輔

契りきなかたみに袖をしほりつゝ末の松山浪こさしとハ

権中納言敦忠

あひ見ての後の心にくらふれハ昔ハ物をおもはさりけり

中納言朝忠

あふ事のたえてしなくハ中々に人をも身をも恨さらまし

謙徳公

あはれともいふへき人ハおもほえて身のいたつらになりぬへきかな

曾祢好忠

ゆらのとをわたる舟人かちをたえゆくへもしらぬ恋の道かな

恵慶法師

八重むくらしけれる宿のさひしきに人こそ見えね秋ハきにけり

源重之

風をいたみ岩うつ浪のおのれのみくたけて物を思ふころかな

大中臣能宣朝臣

みかきもり衛士のたく火のよるハもえ昼ハきえつゝ物をこそ思へ

藤原義孝

君かためおしからさりし命さへなかくもかなと思ひけるかな

藤原実方朝臣

かくとたにえやハいふきのさしも草さしもしらしなもゆる思ひを

藤原道信朝臣

あけぬれハくるゝものとハしりなからなほうらめしき朝ほらけかな

右近大将道綱母

なけきつゝひとりぬる夜のあくるまハいかにひさしき物とかハしる

儀同三司母

わすれしの行末まてはかたけれはけふをかきりの命ともかな

大納言公任

瀧の糸はたえて久しく成ぬれと名こそなかれて猶聞えけれ

和泉式部

あらさらむこの世の外の思ひ出に今一たひのあふこともかな

紫式部

めくりあひて見しやそれともわかぬまに雲かくれにし夜半の月哉

大弐三位

ありま山ゐなのさゝ原風ふけはいてそよ人をわすれやはする

赤染衛門

やすらはてねなましものを小夜更てかたふくまての月を見しかな

小式部内侍

大江山いく野の道の遠けれはまたふみもみす天の橋立

伊勢大輔

いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重ににほひぬるかな

清少納言

夜をこめて鳥のそらねははかるともよに相坂の関はゆるさし

左京大夫道雅

今はたゝおもひたえなんとはかりを人つてならていふよしもかな

権中納言定頼

朝ほらけ宇治乃川霧たえ〳〵にあらはれわたる瀬〻の網代木

相模

うらみわひほさぬ袖たにあるものを恋にくちなん名こそをしけれ

大僧正行尊

諸ともにあはれと思へ山桜花よりほかにしる人もなし

周防内侍

春の夜の夢はかりなる手枕にかひなくたゝむ名こそをしけれ

三条院

心にもあらてうき世になからへは恋しかるへき夜半の月かな

能因法師

嵐ふく三室乃山のもみち葉は龍田乃川の錦なりけり

良暹法師

さひしさに宿を立出てなかむれはいつくもおなし秋乃夕暮

大納言経信

夕されは門田乃稲葉おとつれて芦乃まろやに秋風そ吹

祐子内親王家紀伊

音にきくたかしのはまのあた浪はかけしや袖のぬれもこそすれ

権中納言匡房

たかさこのをのへのさくら咲にけりとやまのかすみたゝすもあらなん

源俊頼朝臣

うかりける人をはつせの山おろしよはけしかれとはいのらぬものを

藤原基俊

契りおきしさせもか露を命にてあはれことしの秋もいぬめり

法性寺入道前関白太政大臣

わたの原こき出てみれは久かたの雲井にまかふ沖つしら浪

崇徳院

せをはやみ岩にせかるゝ瀧川のわれても末にあはむとそ思ふ

源兼昌

あはち嶋かよふ千鳥のなく声にいく夜ねさめぬすまの関守

左京大夫顕輔

秋風にたなひく雲のたえまよりもれ出る月のかけのさやけさ

待賢門院堀河

なかゝらむ心もしらす黒かみのみたれてけさは物をこそおもへ

後徳大寺左大臣

ほとゝきす鳴つるかたをなかむれはたゝ有明の月そのこれる

道因法師

おもひわひさても命ハあるものをうきにたへぬハなみたなりけり

皇太后宮大夫俊成

世中よ道こそなけれおもひいる山のおくにもしかそなくなる

藤原清輔朝臣

なからへハ又このころやしのはれんうしとみし世そ今ハこひしき

俊恵法師

よもすから物思ふころハあけやらてねやのひまさへつれなかりけり

西行法師

なけゝとて月やハ物をおもはするかこちかほなるわかなみたかな

寂蓮法師

むらさめの露もまたひぬまきの葉に霧たちのほる秋の夕くれ

皇嘉門院別当

難波江のあしのかりねの一夜ゆへ身をつくしてやこひわたるへき

式子内親王

玉の緒よたえなはたえねなからへハしのふることのよはりもそする

殷富門院大輔

見せはやなをしまのあまの袖たにもぬれにそぬれし色ハかはらす

後京極摂政前太政大臣

きり〱すなくや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかもねん

二条院讃岐

我袖ハしほひにみえぬおきの石の人こそしらねかはくまもなし

鎌倉右大臣

世中ハつねにもかもななきさこくあまのをふねのつなてかなしも

参議雅経

みよしのの山の秋風さよふけてふるさとさむくころもうつなり

前大僧正慈円

おほけなくうき世の民におほふかなわかたつそまにすみそめの袖

入道前太政大臣

花さそふあらしの庭の雪ならてふりゆくものハ我身なりけり

権中納言定家

こぬ人をまつほのうらの夕なきにやくやもしほの身もこかれつゝ

従二位家隆

風そよくならの小川の夕くれハみそきそ夏のしるしなりける

後鳥羽院

人もをし人もうらめしあちきなく世を思ふゆへに物思ふ身は

順徳院

百敷やふるき軒はのしのふにもなをあまりある

むかしなりけり

寛文九年十二月日

實滿

實滿公 花園参議
従二位
貞享元薨